

川口啓子名誉教授 記念号に寄せて

眞鍋 穰*

今般、川口啓子先生の名誉教授記念号の発行にあたり、川口先生の長年の本大学への貢献、特に福祉実践研究センター長として、介護教育と現場課題を通じて医療生協との組織的連携に務められてきたことに、感謝とともにその功績を讃えたいと感じています。

川口先生は、立命館大学産業社会学部を卒業後、大阪府保険医協会事務局に勤務し、1995年3月立命館大学大学院社会科学研究所博士課程前期課程を修了、1999年4月東北大学大学院経済学研究科博士課程後期課程を修了されました。論文「医療生協の組織的特徴に関する研究－鳥取医療生協の歴史的考察を通じて－」にて博士（経済学）号を取得されています。

本学には2002年4月より2024年3月まで勤務され、事務労働、従軍看護師、介護福祉士の役割について研究され、別記のように多数の論文著書を著されています。

事務労働の分析を通しての現場課題については、保険医協会事務局の経験から得た的確な問題意識によって、多くの組織から講師活動を要請されています。

事務労働を「個別具体的業務は様々なが、事務労働には不可欠性、独自性、付随的発展性、運動性と協業性という普遍的性格を確認することができる。それらは、『管理労働』に通じる本質を持ち、当初の労働が持つ目的を貫徹させる意思の外部化された結合労働過程の全体もしくは部分として、事務労働が存在していると言える」という理論的立場にとどまらず、実践的教育にも力を入れてこられました。

また、日本赤十字社を扱った「従軍看護婦派遣への道程に関する研究ノート（4）：第二次世界大戦とその後」（『創発』2007年3月）や著書『従軍看護婦と日本赤十字社 その歴史と従軍証言』（文理閣2008年7月）の中で、「日本赤十字社は、第一次世界大戦直後から次の戦時準備を行った。1922（大正11）年『戦時救護規則』、『救護員任用規則』、『救護員召集規則』を改正し、第二次世界大戦には、かつてない規模の従軍看護婦の養成、派遣が可能となった。」と述べ、さらに「朝鮮戦争勃発と同時に再び従軍看護婦が召集された。日本国憲法に違反するこの行為は、当時も今も、ほとんど国民には知らされていない。そして、従軍看護婦のその後の生活には、なんらの戦後補償もなかったのである」と述べています。

2003年に「武力攻撃事態法」が制定され、昨年（2025年）高市首相が「中国軍が台湾を海上封鎖し米軍へ攻撃を加える状況などで、日本の存立が脅かされれば『存立危機事態（安保法制による集団的自衛権行使の要件）』に該当する可能性が高い」と明言した今日、集団的自衛権を明確に禁止している憲法前文と第9条第2項を、憲法守護義務のある現職首相が無視するという事態に陥っています。そうした現状を見るにつけ、さらに国民の多数意識と選挙結果が大きくズレる（※3割の得票数で国会では8割の議席を獲得する）という危機的状況が重なる今日、川口先生のこの研究は、戦争放棄を謳う国の国民として必要な歴史的認識の一つではないでしょうか。

川口先生はさらに、「日赤は、戦地傷病兵救護を目的に創設された組織である。平時には、戦時準備として救護員の養成を行い、第二次世界大戦終結まで従軍看護婦養成、派遣を積極的に推進した。西南戦争当時、救護員

*大阪健康福祉短期大学 学長

養成はまだ行われておらず、現地募集の男性が救護にあたった。その後、従軍看護婦養成を開始し、日清戦争においては看護婦を厳選しつつ国内予備病院に限って救護活動の任にあたらせた。日清戦争時の救護活動の評価が良好であったことを受け、北清事変ではさらに病院船勤務を実行し、従軍看護婦は内地から海上へと勤務先を拡大していったのである。これらの続きに日露戦争と二つの世界大戦があるのだが、本稿では、今日の「武力攻撃事態法」において日赤が公共指定機関となっていることを念頭におきつつ、従軍看護婦派遣の初期の道程を追った。」と述べます。その適時性は重要です。

川口先生は、介護福祉士養成校の実情と介護現場との乖離についても、「わかりにくい介護保険…制度を学ぶ機会がない」、「脆弱な地域社会…つながり喪失＝社会的孤立」、「要介護者＝迷惑…未熟な人権感覚」、「介護職員の不足…家族責任・自己責任から逃れられない」などの現状にふれながら、今日の介護をとりまく状況を発信し続けています。

著書『あなたの介護は誰がする？—介護職員が育つ社会を』にとどまらず、マスコミをつうじて的確に問題提起し続けてきた点においても、「生協10の基本ケア」を推進してきた点においても、単なる研究者に留まらない行動の人であることに、あらためて敬意を表する次第です。

2026年2月19日

別記

- 2000年6月 「介護保険下に於ける福祉サービス提供事業と生活協同組合—組織」的特徴に注目して」『協同組合研究』No.19
- 2001年7月 「博愛社の組織的特徴に関する歴史的分析」『日本医療経済学会会報』第20号
- 2003年7月 『日本赤十字の素顔』あけび書房
- 2004～2007年3月 「従軍看護婦派遣への道程に関する研究ノート（1）～（4）」『創発』第2～5号
- 2006年12月 「事務労働への「管理労働」論的アプローチ」『医療政策学校』No. 3
- 2006年3月 「学生参加型授業の試み—2005年度「福祉経済論」における学生たちの多彩な報告」『創発』第4号
- 2006年1月 「戦時準備2006—戦前の日赤の姿から考える」『国民医療』No.220
- 2007年3月 「事務労働研究の視座—『管理労働』論的アプローチ」『創発』第5号
- 2009年3月 「事務労働論のための研究ノート—理論化の手掛り」『創発』第8号
- 2009年1月 「証言もとに日赤の歴史と組織を解明」『国民医療』No.256

（以上、略年譜と重複しないものを載せています。）